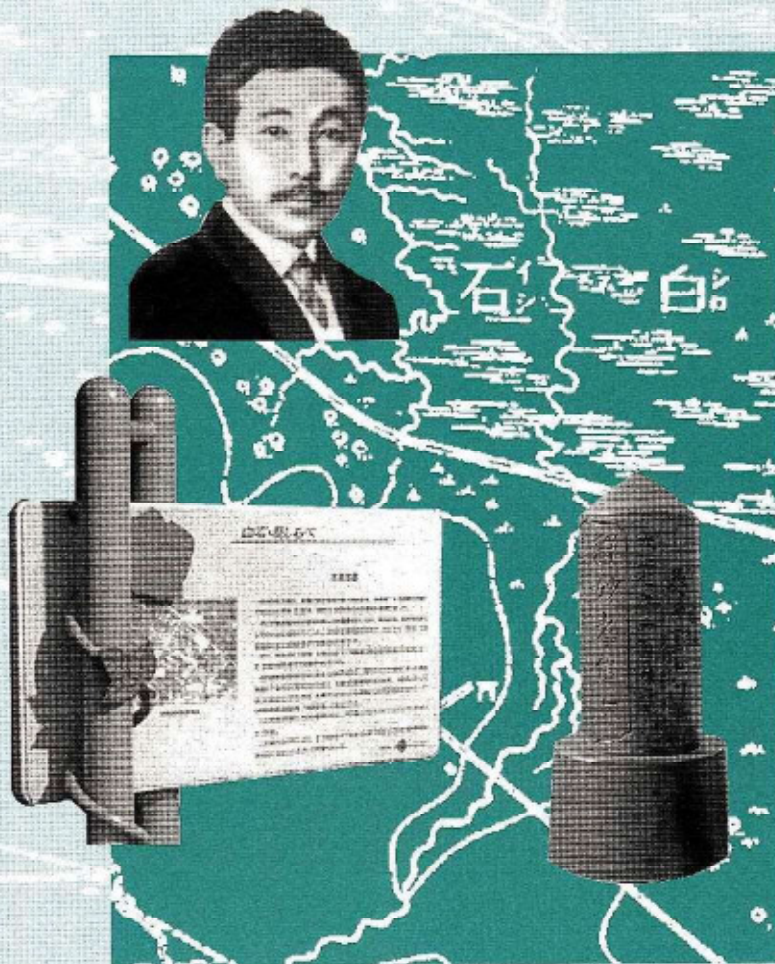


れ き
白石歴するべ
改訂版

区内の歴史案内板「歴するべ」紹介



白石区役所

この「白石歴するべ」は、平成17年3月に発行された改訂版をそのまま複写して製本したものです。
白石区のホームページにも掲載しています。

<http://www.city.sapporo.jp/shiroishi/shokai/history/rekishirube/index.html>

もくじ

白石発展の足跡	 2	水源地通	46
白石歴史年表	 4	北海道暗渠排水施設発祥の地	48
白石発展のあゆみ		納豆博士・半澤洵生誕の地	50
北海道に新天地を求めて	 8	有島武郎邸跡地	52
白石開拓のリーダー佐藤孝郷	10	札幌遊郭と北海道庁立札幌治療院跡	54
白石村1番	12	大谷地駅跡・月寒駅跡	56
望月寒川	14	旧札幌石炭坑爆発予防試験所	58
白石村役場跡	16	旧国鉄東札幌駅周辺の工場地帯跡	60
善俗堂跡地	18	旧本通倶楽部	62
横丁通（札幌本府通）	20	連隊通・陸軍兵器補給廠・陸軍官舎	64
逆川	22	白石村医療発祥の地	66
白石神社	24	板橋地区跡	68
白石中央墓地跡・白石本通墓地	26	北都団地	70
白石のリンゴ園	28	豊平川に架かる橋	72
エゾオオカミ捕獲場所	30	伴の渡し（豊平川渡船場）跡	74
ヒグマ騒動の地	31	古い地形図に見る白石区	
幌内鉄道、定山溪鉄道と白石駅	32	明治29年の5万分の1地形図	76
白石村水田発祥の地	34	大正5年の5万分の1地形図	77
鈴木レンガ工場跡	36	昭和10年の5万分の1地形図	78
菊亭侯爵入植地跡	38	昭和40年の5万分の1地形図	79
吉田善太郎住居跡	40	昭和2年上白石地区の住宅地図	80
豊平外三ヵ村聯合用水路	42	昭和23年頃のアメリカ軍	
日本近代酪農発祥の地		撮影航空写真	82
・宇都宮牧場跡	44	参考文献など	94

本書の中に旧暦と新暦の記述があります。旧暦の1年は354日で、旧暦の明治5年12月3日新暦の明治6年1月1日に切り替わりました。また、文中の地名が当時と異なる漢字表記になっている場合があります。あらかじめご了承ください。

白石発展の足跡

(平成12年10現在)

- 白石区が製作した「歴しるべ」標示板があるところ。
- ▲白石区老人クラブ連合会が製作した標示板があるところ。
- アサヒビールが製作した標示板があるところ。
- 標示板なし





白石歴史年表

西暦 年号・月 できごと

明治

- | | | | |
|------|----|----|---|
| 1868 | 元 | 9 | 仙台藩が戊辰戦争に敗れる P 9 |
| 1869 | 2 | 6 | 片倉家臣団、傑山寺に集合し、北海道移住を決議する |
| | | 8 | 蝦夷地は北海道と改称される |
| 1871 | 4 | 3 | 旧白石藩士 600 余人、北海道移住開拓使貫属を命じられる P 9 |
| | | 9 | 旧片倉家臣咸臨丸と庚午丸で松島湾寒風沢を出発。咸臨丸は上磯郡泉沢村沿岸で破船 P 9 |
| | | 10 | 咸臨丸乗船者を庚午丸に乗せ函館を出航、小樽に着く。陸路石狩へ移動 P 9 |
| | | 11 | 望月寒に入植。短期間で小屋掛けを終える。それを岩村判官が讃え、白石村と命名する P 12 |
| | | |   |
| | | | 咸臨丸は木古内の岩礁に座礁した |
| | | | 小樽から張碓の難所を越えて石狩へ |
| 1872 | 5 | 3 | 善俗堂を建てる P 18 |
| | | 4 | 本府通開削（現在の豊平神社～国道 12 号～白石神社までの 5.1 ㌾） P 20 |
| | | 4 | 札幌神社遙拝所（後の白石神社）を建てる P 24 |
| | | | 現在の中央 1 条 1 ～ 2 丁目に入植した 18 戸が浸水のため横丁（現在の米里行啓通）に移転 P 20 |
| | | | 白石中央墓地の造成が認められる P 26 |
| 1873 | 6 | 5 | 26 戸が白石村から移住し新白石村ができる |
| | | 9 | 新白石村が上白石村となる |
| | | 10 | 開拓使札幌本庁舎完成 |
| 1874 | 7 | 2 | 樽前山が噴火、村にも灰が降る。札幌は不景気と相まって帰郷者が続く |
| | | | 製糸場伝習工養成のため、開拓使は白石藩士の娘 3 人（11 ～ 13 歳）を本州の富岡製糸場に 2 年間派遣する |
| | | | 東京官園から梅、サクランボ、桃、リンゴなど 4,700 本を開拓使敷地に移植 P 28 |
| 1875 | 8 | | この年から 14 年までに白石村に果樹苗木が開拓使から配付される P 28 |
| 1878 | 11 | | 菊亭脩季侯爵が来道 P 38 |
| 1879 | 12 | 1 | 開拓使札幌庁舎が火事で焼失 |
| | | 6 | 北郷に岩手県人稲垣岩松が入植する |
| | | | 大雪のため、全道の鹿が絶滅しかかる P 30 |
| 1880 | 13 | 1 | 幌内鉄道着工 |
| | | 3 | 五力村戸長役場が上白石 14 番地に置かれる P 16 |
| | | | 白石本通墓地造成 P 27 |
| 1881 | 14 | 4 | 善俗堂が公立白石学校となる P 18 |
| | | 14 | 豊平川鉄橋完成 P 72 |
| 1882 | 15 | 2 | 北海道が札幌・函館・根室の 3 県に分けられる |
| | | 11 | 幌内鉄道が開通。白石には仮停車場が設置されたが翌 16 年に廃止された P 32 |
| | | |   |
| | | | 白石仮停車場 |
| | | | 豊平川鉄橋 |
| 1883 | 16 | | 南郷に岩井沢七兵衛が入植する。イナゴの大群来襲、16 年も続く |
| | | | 開拓以来の大干害だったが、白石村中央と厚別の湿地で水田試作に成功する P 34 |
| | | | 信州信濃（長野県）から 8 戸が厚別の開拓に入る |
| 1884 | 17 | 7 | 北郷に鈴木煉瓦製造所ができる P 36 |
| 1885 | 18 | 11 | 元白石村貫属ら、ようやく士族籍に編入される |

西暦	年号・月	できごと
		宇都宮仙太郎が大分県から北海道に渡り、真駒内牧場実習生となる P 44
		大谷地、野津幌、下野津幌の開拓が始まる
1886	19 1	三県制を廃止し、北海道庁を置く。この年、コレラ・天然痘が流行し、本道の死者約 3,000 人に上る
	9	旧華族・菊亭脩季が上白石村で農園を始める P 38
1887	20 年末	白石村 189 戸、人口 866 人となる
1888	21 12	白石産レンガを使った道庁庁舎が完成
1889	22 11	札幌ー白石ー江別間の江別道路（現在の国道 12 号）が開通
	12	北海道炭鉱鉄道が開拓使から幌内鉄道の払い下げを受ける
1890	23 11	東橋が完成し、札幌への往復が非常に便利になる P 72
		米里に本城春蔵らが入植し開拓始まる
1891	24 10	札幌に初めて電灯がつく
	10	白石・上白石ほか 3 村が連合して札幌農会を創設。札幌に北海道果樹協会が設立される P 28
		吉田善太郎が大谷地一帯に灌漑用水路を造る P 40
1893	26 4	上白石稲作試験場が設立
1894	27 1	豊平外三ヶ村聯合用水組合設立 P 42
	8	日清戦争が始まる
		逆川に米里水門が設けられる P 22
1895	28	中澤八太郎が川下地区で暗渠排水による水田を始める P 48
1896	29	月寒に独立歩兵大隊が新設。有島武郎、札幌農学校に編入学 P 52
1897	30 4	白石・上白石両村戸長役場が 47 番地に置かれる P 16
	9	札幌神社遙拝所が正式に白石神社と命名される P 24
		白石・上白石両村の戸数 1,203、人口 4,654 人
1899	32 10	札幌・函館・小樽に区制がしかれる
1900	33 4	上白石尋常小学校開校 P 18
1902	35 2	白石郵便受取所が開設される
	4	白石村は上白石村を合併、二級村になる P 16
	6	宇都宮牧場が上白石に開設 P 44
		
		白石本通墓地の設置が正式に認められる P 27
1903	36 4	白石駅開業 P 32
1904	37 2	日露戦争始まる
1905	38	独立歩兵大隊が白石駅前から連隊通を造る P 64
1906	39 3	鉄道国有法公布
1907	40	札幌酪農組合設立 P 44
1909	42 1	道庁庁舎が焼ける
	3	有島武郎、結婚して上白石 2 番地（菊水 1-1）に住む P 52
1909	42	西岡水源池が月寒歩兵第 25 連隊によって造られる P 46
1910	43 4	上白石村の一部（菊水地区）を札幌区に編入
1912	45 3	札幌に初の映画常設館・第二神田館が開設。白石村でも評判になる
	7	白石開村碑を建立する



菊亭脩季侯爵が
農場を経営する



鈴木煉瓦製造場

宇都宮牧場が菊水に開設



宇都宮仙太郎が菊水に
牧場を開く

大正

1913	2 4	江別町小野幌地区を編入
	8	27、28 日の暴風雨で水田反収平均わずか 6 割
1914	3 7	第一次世界大戦始まる
1916	5 4	白石村青年団が結成される P 62
1917	6 4	江別町の一部を編入する
	10	豊平川渡船場（伴の渡し）設置 P 74
1918	7 8	札幌、小樽で開道 50 年記念博覧会が開かれる



有島武郎が菊水に住む

西暦 年号・月 できごと

			札幌に初めて電車が走る 白石一定山溪間に鉄道開通。定山溪温泉が栄える P 32 この年から9年にかけて札幌遊郭（通称白石遊郭）が薄野から移転 P 54	
				
			大正 12 年の遊郭太田楼	昭和 19 年の健康優良娼妓表彰記念写真
1919	8	8	白石村電灯組合ができ電灯がともる	
1920	9	4	ニシン空前の大豊漁	
		9	白石神社境内に開村 50 年記念碑建つ	
1922	11	1	白石村初代戸長佐藤孝郷 72 歳で死去 P 11	
		8	札幌・函館・小樽・旭川・室蘭・釧路区が市になる この年から2年にわたり冷害凶作が続く。鈴木煉瓦製造場廃業 P 36	
1923	12		一条大橋完成。P 72 関東大震災発生	
1924	13		北郷倶楽部建築	
1926	15	8	苗穂一苦小牧間の北海道鉄道が開通。村内に東札幌、月寒、大谷地、上野幌の駅ができる P 56	
				北海道鉄道が開通
昭和				
1927	2		上白石村の菊亭脩季所有地を北海道炭鉱汽船株式会社が買収、区画整理して分譲 P 38 宇都宮牧場が上白石から上野幌に移転 P 44	
1928	3	6	札幌中央放送局が開局	
		7	瑞穂の池ができる	
			南郷倶楽部建築。本通倶楽部が耐火レンガにより建築 P 62	
1929	4		明治 12 年以来の大雪に見舞われる	
1930	5		上白石橋完成 P 72	
1931	6	7	札幌・小樽両市で北海道拓殖博覧会が開かれる。この年から2年にわたる異常冷気と水害で凶作が続く 苗穂駅始発東札幌駅経由で定山溪鉄道を利用できるようになった P 32	
				上白石橋
1932	7	6	一級町村制敷かれ白石村は一級村となる P 16	
1933	8	5	白石消防組が設立 白石果樹組合設立 P 28	
1934	9		冷害に見舞われ全道の米生産が 117 万石にとどまる	
1936	11	9	本道初の陸軍大演習統裁のため天皇がご来道 横町倶楽部建築 P 62	
1937	12	7	日華事変が始まる	
		7	北海道博覧会が札幌、小樽で開かれる	
1938	13	8	開道 70 年記念祭が札幌で開催される	
		8	農地調整法が実施される	
		10	白石に全国 2 番目の石炭坑爆発予防試験所を設置 P 58 一条大橋が鋼鉄製永久橋となる P 72	
1939	14	4	白石警防団が設立される	
		7	国民徴用令が公布される	
		10	白石商業組合が設立される	
1940	15	7	米麦などの主食が配給制度になる	
1941	16	2	定山溪鉄道の白石・東札幌間の旅客輸送を廃止 P 32	
		4	小学校が国民学校になる	
		12	太平洋戦争に突入する	
1942	17	1	農業生産統制令が公布される 豊平川渡船場（伴の渡し）落合橋完成に伴い廃止 P 74	
1943	18	11	道内 11 の日刊新聞社が合併、北海道新聞社となる	
1944	19	3	料理屋、飲食店などの営業が禁止される	

果樹組合が設立される

西暦	年号・月	できごと
	10	現在の白石区役所の位置に陸軍兵器補給廠ができる P 64
1945	20 5	吉田診療所が開所、75年間の無医村が解消される P 66
	7	緊急開拓者が、東京から北郷と東米里に入植 P 68
1945	20 7	アメリカ軍が本道を初空襲。白石村にも来襲する
	8	終戦
	10	アメリカ軍本道に進駐。白石村にも一部が入る
1946	21 11	改正農地調整法が施行される
	12	自作農創設特別措置法が実施される
1947	22 4	学校教育 6・3・3・4 制が実施される。農地解放が行われる 新選挙法による村長選挙が行われ、初代公選村長に伊藤作一当选
		 戦後の兵器補給廠 は一時釘工場として使われ、借りていた農地は地主に返還された
		 吉田診療所が開設して無医村が解消された。下は吉田医師 
1949	24	村内の 8 開拓団地に 153 戸が入植
1950	25 7	札幌市に白石村全村が編入。村役場は札幌市白石支所となる P 16
	8	豪雨のため北郷、東米里一帯が被災する
1951	26 12	白石支所が札幌市白石町出張所と改称。白石支所厚別分室が札幌市厚別出張所として独立 東橋が鋼鉄製永久橋となる P 72
1952	27 10	農地調整法が廃止され、新たに農地法が施行される
1956	31 5	白石区町内会連合会が設立される
	5	長浜万蔵ら 11 人が本郷の農地を開放、白石発展の端緒となる
	4	国道 12 号の舗装が始まる
1957	32 4	白石町婦人団体連絡協議会が結成される
1958	33	白石遊郭廃止 P 54
1960	35	リンゴ園の宅地化進み白石果樹組合解散 P 28
1961	36	豊平外三カ村聯合用水組合解散 P 42
1962	37 8	台風 9 号で村内の被災 165 戸に上る
1963	38 9	道道白石停車場線改修舗装工事が完成
1964	39 3	この年から 41 年までに北都団地を造成 P 70
1965	40	この年月寒川、翌年望月寒川改修に着手 P 14
1966	41	白石中央墓地の移転始まる P 26
1969	44	定山溪鉄道廃止 P 32
1970	45 8	旧白石村地区の世帯数 43,482、人口 141,089 人
1972	47 4	政令指定都市へ移行、白石区誕生
		上白石橋が鋼鉄製永久橋となる P 72
1973	48 10	白石区の木と花を「ポプラ」と「バラ」に決定 国鉄千歳線が新路線に切り替え P 56
1976	51 6	地下鉄東西線開通
		月寒川に洪水対策のための排水機場完成 P 68
1985	60 12	第二白石区体育館（現 白石区体育館）完成
1986	61 4	白石区の木に「ナナカマド」が加えられる
1989	1 11	分区により白石区の東部が厚別区に
1997	9 3	東札幌図書館オープン
1998	10 3	白石区まちづくりビジョンが策定される
1999	11 7	川下公園オープン



河川改修が進むまでは米里地区にこういう情景が繰り返された



白石城。解体して渡道費用になったが、現在は復元されている

戊辰戦争で領地を失った片倉家

日本が1600年代以降に鎖国を続けている間、欧米諸国は蒸気船を開発し、植民地や貿易国を世界中に広げていた。

中国がイギリスに武力と阿片で平等条約を結ばされたのに続き、日本も黒船で来たアメリカに圧倒的な軍事力を見せつけられ、安政元年(1854)に和親条約を結んだ。

次いで安政5年(1858)に結ばれた日米通商条約は、イギリスとフランスが不利な通商条約を押し付けに来るといふ緊急事態下だったため大老井伊直弼の責任で締結したが、孝明天皇はこれを激した。天皇は政治上形式的な立場に置かれていることの不満に加え、とても外国人嫌いだったことも原因のよ



北海道移住を相談した傑山寺

うだ。

これがきっかけで天皇を中心に鎖国を続けようとする尊王攘夷派と幕府派に二分し、その対立が日本中を巻き込む戊辰戦争に発展した。

時とともに徳川幕府の力は衰え、長州藩・薩摩藩を中心とする勢力によって幕府は廃止となり、慶応4年(1869)に新政府が誕生した。この頃には尊王ではあっても攘夷の考えは弱まり、進んだ外国の文明を取り入れようという考えに変わっていた。

東北地方の諸藩は奥羽越前藩同盟を結んで朝廷を中心とする尊王攘夷派に對抗したが、明治元年(1868)9月、戦いに敗れた。その結果、仙台藩は領地を三分の一に減らされ、白石は領地・屋敷ともに南部藩に明け渡すことになった。白石城を預かっていた片倉小十郎邦憲は1,400人あまりの家臣を抱えたまま土地を失い収入もなく、伊達領内に留まることも許されなくなった。

故郷を離れ北海道移住を決意

当時、蝦夷地と呼んだ北海道はアイヌが住む土地に、毛皮、ニシン、サケなどの資源を求めた和人たちが入り込む程度だった。しかしロシアが南下して領土が脅かされ、松前藩だけの防備では不安があり、南部・津軽藩に警備を命じ、後に加賀・秋田・仙台藩なども沿岸警備にあたった。

維新後の新政府は蝦夷地を実質的に支配し北辺の警備を固めるために、多数の失業武士に蝦夷地の守りと開拓を託すことを考えた。

明治2年4月、片倉家は藩士2人を上京させて家臣一同の生活の道を探らせ、この蝦夷地移住開拓計画を知った。先祖代々の墓と武士の身分を捨てて移住することは辛かったが選択の余地はなかった。片倉家の菩提寺である



嵐の中の咸臨丸

北海道に新天地を求めて

傑山寺で二昼夜議論した結果、1,000人あまりが移住を決意し、明治2年8月に白石按察府に移住願いを出した。

片倉小十郎一行は幌別へ移住

翌9月13日、按察府から「移住先は幌別(現在の胆振支庁登別市幌別)。自費で移住せよ」と指示があった。開拓した土地は自分のものになるので、自己負担で移住することになっていた。しかし片倉家には資金がなく、政府に援助を求めたが断られたため、山崎屋から3,000両の借金をした。明治5年3月、開拓使は2,500両を支出し、不足の500両は政府が貸付金と白石城の解体材売却代金を開拓経費にあてるといふ温情で何とかめどがたった。

明治2年8月15日、太政官布告により蝦夷地は北海道と呼ばれることになった。

なんとか資金の準備ができ移住が始まった。第一団は片倉小十郎邦憲と19戸が明治3年6月22日、第二団28戸が明治4年3月16日に出発した。その後も移住が行われ、明治5年までに85戸227人が移住した。

その後は開拓使が直轄事業として移民を受け入れることに方針が変わり、明治4年3月、片倉家から約150戸600人あまりが応募した。この移民は開拓使貫属（士族の身分をもち北辺を守りながら開拓する人）といい、武士の身分を失った者には何よりも魅力があった。

佐藤孝郷が率いる一行は石狩へ

幌別への第2団を見送った翌日に太政官達し状が届き、白石の600人に開拓使貫属が命ぜられた。移住までの間、もと家老である22歳の佐藤孝郷（廓爾）が貫属取締を命ぜられ、移住までの間、組合規則の策定、旅費・諸経

月4日に松島湾口の島港である寒風沢に咸臨丸が入港した。12日に112世帯401人を乗せて出航、次いで数日後に入港した蒸気船の庚午丸が84世帯194人を乗せて21日に出航した。

咸臨丸は9月17日に函館港に寄港し、2日間の休憩の後20日に出航したが悪天に遭遇し、強風に流され現渡島支庁木古内町サラキ岬の岩礁に座礁した。このときに1人が死亡し数百の荷物を失ったが、開拓使には「一人も怪我なく、荷物も陸揚げし安堵した」と報告している。

咸臨丸は離礁できず、機器類を取り外して放棄された。福沢諭吉らの使節団を乗せて日本初の太平洋横断を成し遂げた咸臨丸の最後を片倉家一行が看取ることになった。



一行が着いた石狩は漁場として栄えていた

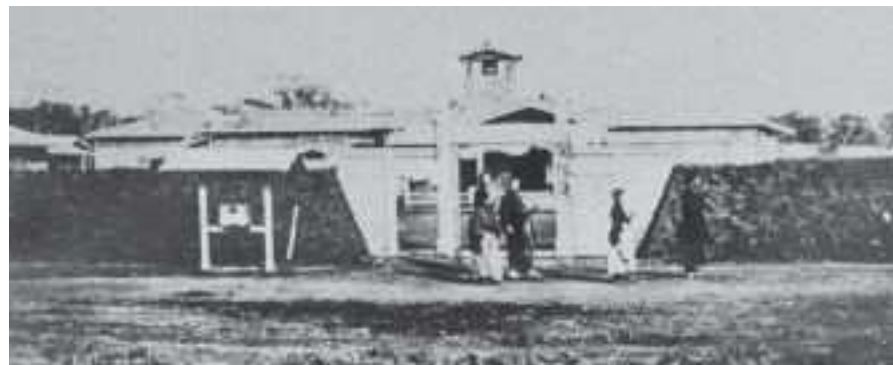
け、数人の老人が死んでいった。少しでも早く入植地に落ち着きたかったが、混乱した開拓使を相手に順調にはいかなかった。

10月28日、佐藤孝郷は開拓使の呼び出しに応じ、札幌の開拓使仮庁舎（北4東1）に出向き、岩村判官に会った。

「600人の家臣が貫属になったことは開拓使は聞いていない。角田県庁の依頼で開拓監事が札幌本庁に告げずに政府に上申したのだらう」と言われて驚いたという。さらに「すぐに冬が来、本州から初めて来た士族には耐えられないから、来春まで石狩で越冬した方がいい」と言われた。

石狩に帰り相談したところ、一同は「石狩で越冬などとてもない。風雪を冒してでも開墾を始めたい」と意気盛んだった。早速札幌本庁と再交渉したところ、すぐに土地割渡しを行うことになった。当初は現中央区山鼻地区を指定されたが、豊平川の川原跡の石原で、カシワの木が多くて地味が悪そうだったのでの開拓予定地である望月寒川流域を見、樹木のよく茂る肥えた土地だったのでここを入植地に決め、さっそく入植を始めることになった。

（税務部納税課・編）



北4条東1丁目にあった開拓使仮庁舎。ここで岩村判官と入植についての交渉をした（明治4年）

費・生活資金援助の申請など多忙な役を果たした。一同は荷物を整理し、家財道具を処分して身支度を整えたが、いつまで待っても移住時期が示されなかった。生活の苦しさが深刻化する一方で、入植希望者の結束も崩れてきた。

旧藩士はもちろん、角田県も開拓使に申し入れたが、連絡手段が悪く、開拓使の内部事情や未開拓地が十分に把握されていないなどの事情があって順調には進まなかった。

ようやく船の手配が済み、半年後の9

一行は函館まで陸路を32キロ歩いて戻り、後発の庚午丸に全員が乗って明治4年10月6日小樽港に入港した。岩場の難所が続く張碇を越えて9日に300人、10日に273人、18日に12人が石狩に着いた。1カ月にわたる長旅だった。港には開拓使開墾係の役人が迎えに来ており、分宿の手配をし、衣類、家具、炊事道具などの世話をしてくれた。

山鼻を嫌い望月寒川流域を選ぶ

旧暦10月は現在の暦では11月半ば。雪まじりの寒風が小屋のなかを吹き抜

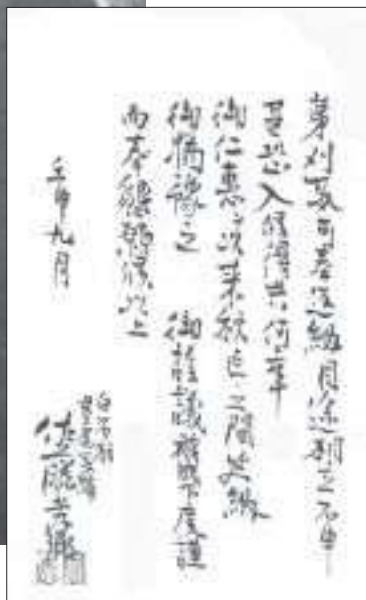


簡素な開拓小屋で厳しい冬を越した

白石開拓のリーダー 佐藤孝郷



佐藤孝郷。右は明治5年に孝郷が開拓使あてに書いた文書



激動の時代の若き家老

宮城県白石から札幌に移住するにあたって、一行を率いたのは22歳の若い家老、佐藤孝郷だった。開拓が始まってからも開拓使との交渉、不安・不満をもつ家臣たちを束ねる大役を果たした。彼なしには白石開拓の成功はなかったといってもいい。その佐藤孝郷はどういう人物だったのだろうか。

佐藤家は主君の伊達家、片倉家と同様に藤原鎌足の血を引く家柄である。佐藤家は片倉景綱の若い頃苦勞をともした重要な武功の家臣であり、その功績により佐藤家第6代の直好から永代着座家老となった。

そのため嘉永3年(1850)に生まれた

孝郷は慶応2年(1866)に16歳の若さで家老職を継いだ。260有余年続いた江戸幕府が終わりを迎える前年である。

家老就任後間もなく戊辰戦争が始まった。明治元年(1868)、奥羽25藩が白石城に集まり白石同盟を結んで結束を固めたが、18歳の家老孝郷はこの重要な会議でどういう役割を果たしたのかは不明である。

戦争に破れ、仙台藩は禄高を減らされた。白石を預かる片倉小十郎は玄米55俵と、無いに等しいまでに減らされ、家臣団7,459人は失業して路頭に迷うことになった。

生きる路は北海道開拓のみ

ある者は地元にとどまり百姓となり、

ある者は主君長男の片倉小十郎景範とともに明治3年(1870)現在の登別市幌別に移住した。このときに家老の佐藤孝郷も加わって北海道の状況を調査し、翌年正月に帰郷した。

残る者の移住がなかなか決まらず、資金が底をつく状況のなかで孝郷は再三にわたり白石県や角田県に交渉したがいっこうに事態は進まなかった。

明治4年3月17日、ようやく太政官は角田県在留の家来600人に北海道移住開拓使貫属を命じ、後日、佐藤孝郷に貫属取締を命じた。

孝郷が取締を命じられたのはもと家老だったという理由だけではなく、維新の後の混乱した事態をまとめ、ここ

までもってきた統率力が評価されたからだろう。

佐藤孝郷に率いられた600余人の老若男女の大集団は、咸臨丸が座礁する事故を乗り越え、10月9日に石狩に到着した。

しかし、いつまでも入植地が決まらず、一行は厳寒と食糧不足から不安に駆り立てられた。孝郷は彼らを慰め、励ましながら開拓使と交渉を続け、さらに開村への計画説明など息つく暇もない毎日だったはずだ。

そんなとき役に立ったのは先年幌別へ渡った体験だった。それをもとに「北海道国名廃止建白書」（明治4年11月・北海道文書館蔵）を記して開拓使に提出して驚かした。この一編は、知識人孝郷の印象を強くし、さらに引率力と実行力を認識させることになったのである。

才能を認められ役人の道へ

入植の翌5年春、孝郷は他の同胞同様荒れ地を開墾し、畑を広げるつもりだった。しかし、彼の实力を知った開拓使は5年4月16日に孝郷を呼び出し、白石村貫属取締戸長を命じた。この役職は多忙を極め、開墾に従事する余裕はなく、自然に役人の道を進むことになった。

その後の彼の足取りをみると、

6年 札幌学校漢学助教授兼舎監(23)

7年 札幌町戸長兼白石・雁来両村戸長(24)

8年 札幌区初代戸長(25)

9年 開拓使13等出仕(26)

11年 黒田長官とサハリンへ随員(28)

13年 開拓使6等属 記録局公文課(30)

14年 札幌郵便取扱役(局長役)(31)

15年 養子安親に郵便取扱役を譲る(32)

17年 大蔵省主税局判任4等属(34)

33年 現慈恵医大漢学講師(50歳)

となっている。

また、開拓使の役人となった彼は住居を次のように変えている。

① 白石村28番地 安斉篤敬と同居

② 上白石村13番地 安斉と同居

③ 札幌区南2条西1丁目

④ 東京都白金台(詳細不明)

多くの若者を役人に登用

孝郷は若者の教育の重要さを考えていたとみえ、最初の土地割り当てでは善俗堂学問所(白石小学校の前身)用地を確保している。また、時の政府の方針に沿って若者の医学進学、農業修業への道に15人もの進出を取締戸長として支持している。

その他開拓使への就業、巡査、電信係などの就職先を紹介して、明治5年から14年までの間に54人もの若者が北海道開拓への道へ進んでいる。

しかしこのことは、白石村、上白石村農業開墾を支えていたのは、老人や女性の手にゆだねられていたと推測されるから、当時の孝郷評価はどうであったのだろうか。

孝郷の札幌在住は、わずか14年数カ月にしかならないが、彼の業績を示す文書が数多く、北海道文書館や北海道開拓記念館で見ることができる。筆跡から想像できるのは、端正、精緻、漢文調の語句使用から教養の高さなどである。

孝郷は札幌を去る理由を「旧藩主片倉景範が幌別から白石村へやってきた。

慊焉(けんえん=心に満足しないさま)たるものがあったから」と述べている。

もう一つの理由は、養子安親の部下が金銭的不祥事を起こしたため、保証人の彼が私財まで提出しなければならなくなったこともある。

孝郷の思想は「比例均衡」にあった、と教え子の飯田芳久氏が日本医事新報(昭和35年9月号)で述べている。

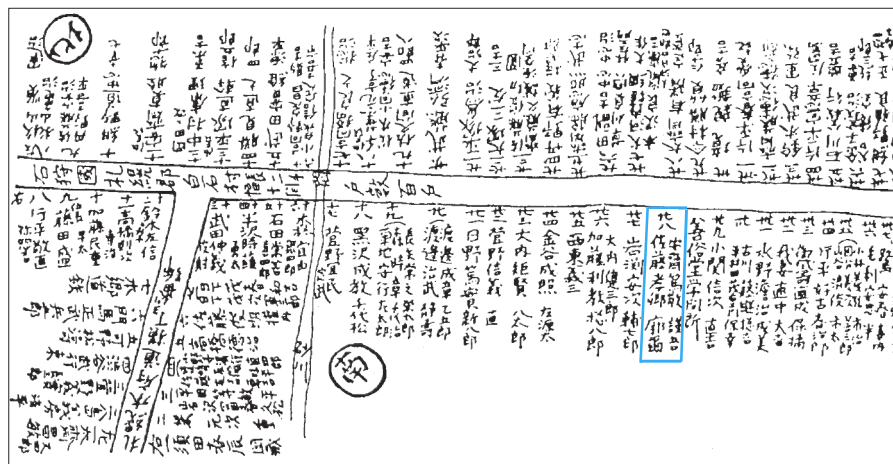
授業ぶりはユニークであつたらしく、教室に入るとまずは東方に向かって、かしわ手を打って礼拝し、おもむろに教科書にも礼、漢文読みは朗々、時には自作の漢詩を挿入したという。時事談義には熱が入り、授業は脱線がよくあつたそうである。

慈恵医大の高木兼寛学長の信任が厚く、伝記の執筆を行っている。

大正9年8月白石村を訪れているが、9月の開村50年記念式典には出席せず、祝辞のみを届け「今や往事ヲ回想シ転々感慨二堪ヘズ」と発展ぶりに期待した言葉を述べている。

砂糖をなめるのが好きだったという孝郷は、胃腸病を患い、治療の甲斐なく大正11年1月10日、72歳で生涯を終えた。白石から惜しい大人物を失ったとしみじみと思われる。

(中濱康光)



佐藤孝郷の土地は右28番、善俗堂(現在の本通3丁目南)の西寄りに位置する



昭和15年頃の国道12号。道幅は現在の半分以下で、人通りもない。場所は不明

今の国道の札幌側から番号をつけ、 一番は旧千歳線陸橋付近だった

入植地を決める

旧仙台藩白石の人々が最初に入植を指定された土地は山鼻だった。しかしカシワの多いところは地味が悪いと判断してここを断り、月寒の北外れ、後に白石村役場（今の白石会館）ができる丘から見た望月寒（今の白石中央）を入植地と決めた。

開拓使が先に幅10間（18㍍）、延長2,000間（3,600㍍）の道路を切り開いており、この両側に1戸あたり間口40間（72㍍）、奥行300間（540㍍）の土地を100戸分割り当てた。道路といっても、切り株が残り、湿地もありで、現代の感覚では道路とは言えないものだったろう。

道路をはさんで番号をふる

土地の位置はくじ引きで決められたが、誰もが札幌に近い方を望んだ。身分の高さも配慮されたので身分が高い人は札幌側に多かった。貫属取締の佐藤孝郷は右28番で、ほぼ中間の位置にあるが、全体を管理しやすい位置ということで決められたのかもしれない。後に善俗堂が隣に建てられ、村の会議はここで行われたが、村の中間なので都合がよかったのだろう。

このときの1番の正確な位置ははっきりしていない。当時は正確な地図が

ないため、現地を見ながらおおまかに決めたと思われる。

確認の唯一の方法は現在の所有者からさかのぼって調べることだが、開拓の当初からめまぐるしく所有者が変わり、小さく分筆されているので、調べるのは極めて難しい。

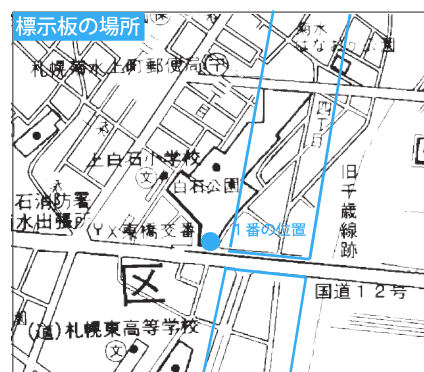
ひとつの手がかりとして、奥羽盛衰見聞誌（明治初期）と現在の地図を重ねてみた。この古地図と現在の地図を国道12号を軸にコンピュータ処理で重ね合わせてみると、意外に正確であることが分かる。周辺部はかなりデフォルメされているが、幹線道路はほとんど正確である。

1番の位置は菊水地区と白石中央地区の境界線で、旧千歳線と国道12号の交わる地点、陸橋の下である。道路の両側それぞれに右、左をつけて1番から50番まで番号を割り当てた。

この古地図は1番から7番までが横丁に移った後なので1番の位置が記載されていないが、区画と思われる短線の区切りで判断すると、現在の白石公園付近が1番と推定できる。

1番から7番までは春に水に浸かる

入植した翌年、雪解けとともに左右1番から7番までの14戸が水浸しになり、住めなくなった。低湿地だったために



起きたことで、この人たちは南側に土地割をしてもらい横丁地区に移住した。

当初は道路を挟んで左右に1番から50番までの番号が割り振られたが、翌5年には1番から100番までの連番に変更されている。

本府へはぬかるむ細道

札幌本府を往復する道路は最も重要だったが、豊平川を渡るには唯一の橋である豊平橋を渡るしかなかった。

豊平橋付近に開拓使の製材所があり、ここから白石に向かう斜めの踏み跡程度の道があった。この道は巻末の大正5年の地図に「山道」と記されているが、この道が本府への唯一の道だった。小屋掛けなどの資材はこの道から運ばれた。

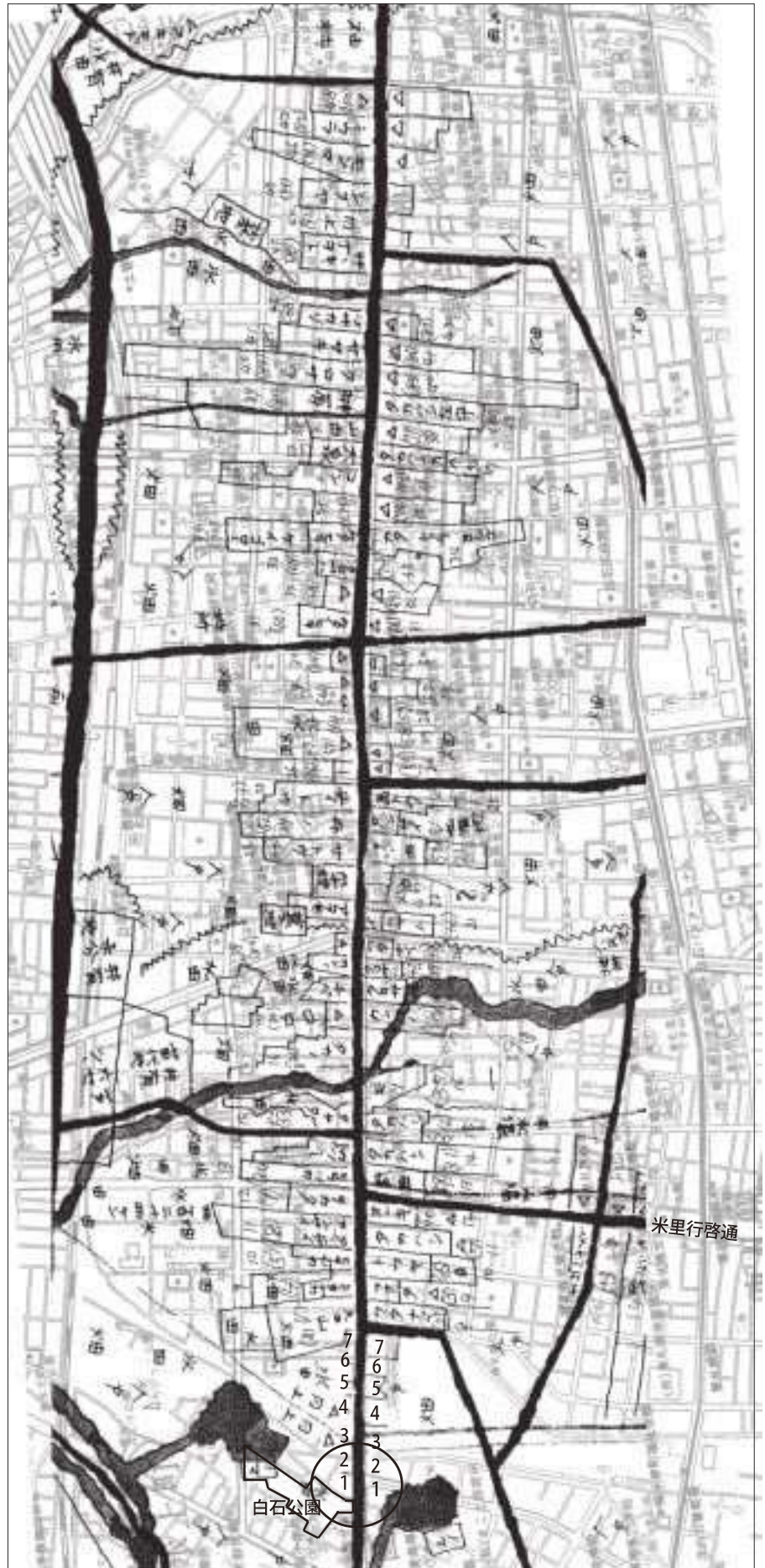
白石村民はこの道を馬車も通れる道にするようお願いしたが、開拓使は明治5年から1年間をかけて幅5間(約9間)、延長2,588間(約4,700間)の、現国道36号に抜ける札幌本府通を造った。しかし冬は交通が途絶え、夏は深くぬかるんで、馬車が通るのが困難という道で、快適な道路になるまでには長い年月が必要だった。

山道と呼ばれた白石最古の道路は道道東札幌停車場線として現在も健在である。

(塩見一釜)

※望月寒は古い時代から「もちきさつぷ」、「もつきさつぷ」、「もつきさむ」と呼び方が変わっている。

奥羽盛衰見聞誌の図と現在の地図を重ねたもの。これによると1番の位置は白石公園の付近であることが分かる。





川沿いに野草や樹木が茂ったり、花が植えられていたり、今も市民と共にある川であることが感じられる

水利・開拓の起点として

旧暦明治4年11月、北海道開拓使貫属（武士の身分をもち、北海道の防備と開拓に従事する者）の命を受けた仙台藩土片倉小十郎の家来、佐藤孝郷ら67名の先発隊が土地割渡を受けるために豊平川を渡し、東岸の土地で最初に渡ったのがこの望月寒川だった。

海拔60㍍の月寒丘陵から石狩平野を眺めると、左に望月寒川、右に月寒川があり「水利の便はよい。ここを開拓しよう」と衆議一決したのである。

アイヌ語で「モ」は「小さい」で、モ・チキサプ川は月寒川の支流という意味だろうが、「チキサプ」の語源は「アカダモの木片で火をおこしたところ」など諸説があり、はっきりしていない。

当て字は開拓期当初は最月寒だったが、間もなく望月寒に変わった。これから開拓を始める月寒川流域一帯にて足を踏み入れるにあたって、素晴らしい土地になるようお願いを込めて、「望」の字をあてたのだろうか。

入植した旧仙台藩士たちは、官軍との戦争に負けて武士としての家禄はなく、荒れ地を耕し、畑を作って生産を担うしかなかった。開墾にすべての「望み」を賭けていたのだ。

開拓使の指示で現在の国道12号の原型となった道を入植区間に造ることに

なった。旧千歳線と国道12号が交わるあたりから望月寒川を渡し、幾つかの小川を越える長さ2,000間(3,600㍍)、幅20間(36㍍)の道だ。

望月寒川の功罪

望月寒川は真駒内南部の丘陵を源として、支笏湖カルデラ噴火による軽石流堆積場台地を流下し、月寒公園池の縁、国道36号を越えて白石に入り、菊水を潤して月寒川と合流する。

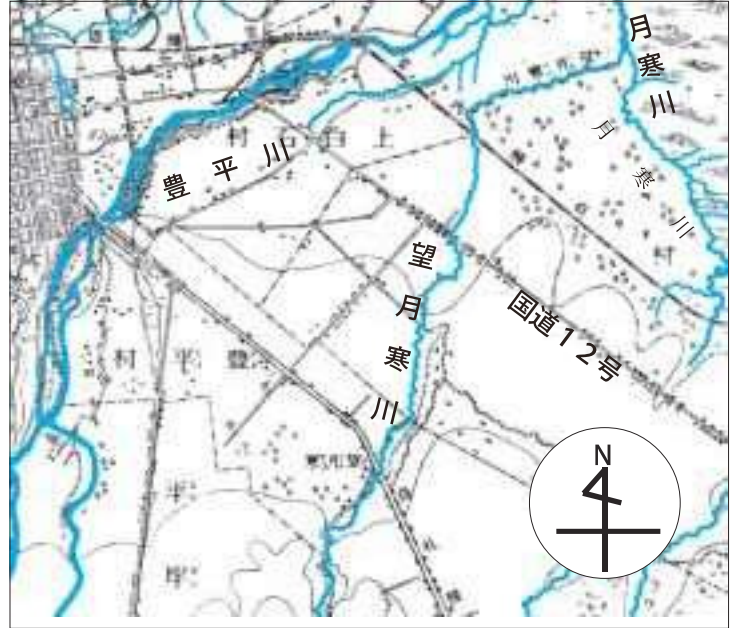
豊平川は明治4年から平成5年までの間に、40回も洪水を起こしているが、望月寒川も同様に氾濫を繰り返したはずである。入植後最初の災害は、旧暦明治5年(1872)3月、雪解け水が低地に流入し、土地割渡を受けた左右1～7番地、18戸の浸水である。この状況は毎年繰り返されることになるので、本通の横丁の踏み跡程度に細い札幌本府通沿いに移り住んだ。そのためそこは横丁と呼ばれた。最後の水害は昭和39年(1964)9月9,10日で、この頃に農業をやめる人が出てきた。

望月寒川は、災害ばかりでなく限らない恵みも与えてくれた。

この川にはサケ、イトヨ（トゲウオ）、ウグイ、ドジョウ、ニジマス、アメマスなどが生息した。まだ牧畜を行っていない時期だから、食用肉は狩を行うしかなく、川魚は貴重なたんば

豊かな自然の恵みを与えた 白石の母なる川、望月寒川





古い地図を見ると、望月寒川が白石の中央を流れ、重要な存在であったことがわかる（明治29年の5万分の1地形図）

く源であった。

明治7年、開拓使から村民に米の種粃が配られると、川水を使って試作を繰り返した。望月寒川沿いの白生公園には開田碑があり、碑文によると明治14年（白石村誌では16年）に稲作に成功し粃79俵を得たとある。望月寒川が与えた大いなる恵みである。こうして、北郷、菊水、川下一帯に水田開発が進み、穀倉地として札幌市民を助けたのである。

札幌市に合併する前の白石村勢一覧（現厚別区を含

む）には、稲作面積1,015町3反2畝（1,007⁶/₁₀）、収穫高は19,074石（3,440^{キログラム}）と記されている。

都市化の波の中で変貌

昭和40年までの地図を見ると望月寒川は蛇行した自然河川のままで。昭和41年（1966）から8年計画で土地区画整理事業が進められ、総額9億7千万円で道路、公園、河川の改修が行われた結果、川はかなり直線化された。

望月寒川と月寒川の合流点に開発局が月寒排水機場を造り、石狩川の逆流を防ぐ工事も行われ、下流域の洪水対策も進んだ。月寒射撃場から道道西野白石線までは砂防河川として、兩岸がコンクリートで固められ、味気ないが安全な河川になった。

川と直接かかわる生活がなくなり、川の姿も単なる排水路化してなじみにくくはなったが、開村以来白石に恵みを与えてくれた母なる川「も・ちきさっぷ川」の名は失いたくない。

（中濱康光）

昭和29年の望月寒川。下は国道12号の白石中央4、5丁目付近



丘に建つ大正時代の白石村役場

入植とともに始まった行政

官軍との戦争に敗れ、領地も家も戦も失った仙台藩士族片倉小十郎の元家来たちは、生活をするのができなくなったため、新政府が進めた北海道開拓の移民に応じるようになった。

政府は開拓に向かう元武士の600人に北海道移住開拓使貫属（武士の身分をもち、北海道の防備と開拓に従事する者）を命じ、家老職の佐藤孝郷には貫属取締を命じた。佐藤孝郷は22歳と若かったが、明治維新以後の混乱した事態を收拾してきた統率力が評価されたものだった。

佐藤孝郷たちは苦勞の末に明治4年（1871）10月に札幌にたどり着いた。冬が間近だったので開拓使は春を待って開拓を始めることを勧めたが、一行はすぐに入植地向かい、超人的ながんばりで小屋掛けを終わらせた。

ここから白石の歴史が始まるのだが、開拓のための資材の手配、井戸掘り、教育などで開拓使と交渉が必要となり、そのときの嘆願書が残されているが、行政はこのときからすでに始まっているといえる。

めまぐるしく変わる制度

明治5年4月、佐藤孝郷は白石村貫属取締兼戸長を命ぜられ、明治7年（1874）1月には札幌町戸長兼白石・雁来両村戸

長になり、7月には札幌第1大区副区長（札幌全部）となった。区長を置かなかった当時としては、札幌市街を含む札幌すべての執政者になったのである。

町村役場の前身である戸長役場が白石村に置かれたのは明治13年（1880）である。豊平、白石、上白石、平岸、月寒の五村戸長役場が上白石村に置かれ、後に白石村3番地に移された。これから明治35年に二級町村制が施行されるまでの23年間は戸長役場時代である。

明治15年に開拓使が廃止され、北海道は札幌県、函館県、根室県の三県に分けられた。札幌県下の各村は札幌区役所の管轄を離れて札幌外五郡役所に属することになり、明治18年に戸長役場は豊平村6番地に移された。

この三県制はうまくゆかず、明治19年に北海道庁ができて三県は支庁に改められ、白石村と上白石村は道庁の管轄になった。明治30（1897）年5月27日の北海道一、二級町村制公布に伴い、6月13日道庁告示により豊平外四カ村戸長役場から白石村・上白石村戸長役場を分離し、7月15日に白石村47番地（現在の白石会館の場所）に二級町村制白石村役場を開設、9月に札幌支庁（現石狩支庁）の管下に入った。

明治35年4月、二級町村制施行により、白石村・上白石村を合併し、戸長

入植の下見をした丘に建った村役場が、白石百年の歴史を刻んだ



役場を廃して白石村役場を開設。村議会・村長制に移行した。村名を白石村とし、旧村名を大字白石村・大字上白石村と改めた。

二級村から一級村へ

二級町村制というのは、北海道の特殊事情を考慮して、一級町村制を施行するまでには成長していない町村に対して施行する制度だった。一級町村では町村長、助役、収入役の三役は町村会（今の町村議会）が選挙して北海道庁長官の認可を受けるが、二級町村の三役はすべて長官に任命権があった。

昭和7年(1932)、待望の一級町村制が白石村に適用され、自治権は大幅に拡大された。以来、昭和25年(1950)に札幌市と合併するまでの19年間、一級村として栄えていくが、太平洋戦争の渦中に巻き込まれる不幸な時代でもあった。

この間、明治43年4月、上白石村の一部（旧菊水西町・北町）を札幌区に編入し、大正6年に江別町の一部（現小野幌）を白石村に編入した。

札幌市に編入

昭和24年(1949)に札幌市に編入する話が各所から持ち上がってきたが、当時は上白石地区は住宅地、工場地帯とも急激に発達し、札幌市内とほとんど区別がつかない状態だった。同年に札幌市長から白石村長あてに正式に編入の意向の照会があり、この問題は一気に表面化した。

白石村議会では上白石の一部に限って編入する申し合わせをしたが、他地域から多数の編入陳情があったため、昭和25年の議会で全村編入が決定し、その年の7月に編入が実現するというスピード実現だった。

村役場庁舎は札幌市の白石支所、昭和26年12月からは白石出張所として使われた。昭和47年には札幌市が政令指定都市に移行し、白石区役所が設置されたために庁舎は解体され、跡地の一部に現在の白石会館が建てられた。

（富岡秀義）



札幌市に編入した当時の白石村役場。建物は昭和4年に建てた



昭和23年頃撮影の米軍航空写真。現在の国道12号線に面して庁舎があった。



明治41年白石尋常高等小学校の卒業写真

善俗堂誕生

士族としての誇りを捨てきれなかった旧仙台藩白石の人々は、どんな環境にあっても子供たちの教育を忘れることはなかった。明治5年3月に土地割り当ての右28番地（佐藤孝郷）と29番地（小関新次）の間に学問所を開き、4月には善俗堂と名付けられた。カヤ葺き18坪（60平方 m ）で、今の本通3丁目南の位置である。翌年には早くも村人の寄付を受けて校舎の新築をしている。

初めは生徒18人、先生は杉山順と渡邊丹助の2人だった。開拓使から補助金36円を受けたが、授業料は10銭と15銭の2種類とし、貧しい児童には書籍や文房具を貸し与え、また村内の寄付を利殖して基金とするなど、活発に学校維持を図っている。

またこの学問所は村の会議の場としても使われた。この寺子屋が白石小学校の始まりである。その善俗堂には5つの定めがあり、

- (1) 師弟の礼儀を大切にする
 - (2) 年上の人を敬い年下の人を憐れむ
 - (3) 学校で喧嘩しない
 - (4) 席の座り方は学問の進んでいる順で年齢の順も考える
 - (5) 火の用心をし道具の乱雑がないようにする
- というものだった。

明治7年に12番に移転

明治7年には善俗堂の生徒は31人となり、校舎が手狭になったので、白石

村12番地に校地100坪（330平方 m ）を求めて、村事務所を併置して校舎を建て、「村学舎」と言った。今の中央2条3丁目藤光鋼材㈱事務所の位置にあたる。明治8年頃の授業内容は、午前8時登校、読書、10時算学、11時運筆、午後2時下校となっていた。

明治14年（1881）4月、校名が公立白石学校になり、15年に白石村の中心地の48番の現在地に校舎を新築し、建坪44坪（145.2平方 m ）となった。

さらに明治16年10月16日、村民の寄付486円あまりで35坪（115.5平方 m ）の校舎を増築した。明治18年になると補助金は25円20銭に削られたが、この年の総経費296円は補助金以外に協議費（今のPTA会費）と授業料でまかなわれていた。

簡易小学校、尋常小学校、尋常高等小学校と改称

明治20年に白石簡易小学校が設置されて白石学校は自然廃止となり、進学希望者は創成小学校に通学した。明治23年4月には白石尋常小学校と改称した（白石村誌による。さっぽろ文庫46巻では29年4月）。明治29年4月、修業年限が4年となり、10月には職員室など45坪と奉安殿も建設した。

明治31年6月、2年間の補修科が認可された。32年9月、大谷地に分教場を設けた。33年、さらに45坪増築し、6月には上白石小学校ができて分かれていった。それでも校舎は手狭だった。

開拓民の子の学問所「善俗堂」は 白石小学校の前身となった





昭和23年頃の航空写真で見る白石小学校付近

34年4月、公立白石尋常高等小学校となり、高等科2年が設置されたが、35年4月には3年に、39年4月には4年になった。41年4月には義務教育が6年になり、それまでの高1・高2が小5・小6となった。

このころの児童の服装は、和服に下駄、わら靴などで、遠足にはおにぎりを腰につけて、起伏の多い村内を歩いたが、小川が流れ、畑の果樹にはサクランボがたわわで、虫も鳥も多く、自然が豊かだった。

戦時中は軍が一部を使用

大正時代は9年と13年に校舎の増築を行っているが、大正10年当時で校舎1,221平方 m 、敷地2万1,848平方 m 、付属地2万1,562平方 m を所有していた。この農業実施地は明治36年度から事業を始め、大正5年度までに8,194平方 m を開墾した。大正11年5月の開校50周年には、寄付金1,072円あまりで図書、理科器具、掛け図、標本、体操器具などを購入、子供たちを喜ばせた。

昭和8年、新校舎を建てるために、しばらく二部授業を強いられ、昭和9年6月、校舎の全面改築され、校地も1,300平方 m 増えた。戦局が厳しくなった昭和16年4月、公立白石国民学校と改称し、この年の5月と10月に10日間ほど

農繁休暇が実施された。

19年、軍部は北海道への敵軍上陸を想定して、白石村厚別に弾薬庫をひそかに造り、陸軍兵器補給廠を白石村南郷(今の白石区役所、南郷丘公園付近)に設置、陸軍鉄道司令部は本部を白石国民学校に置き、運動場や教室の一部を使用した。このため、高学年は教師の自宅で授業を受けるなど、授業場所の確保には苦労があった。

生徒急増で増築が間に合わず

終戦後の昭和22年4月、教育制度が改正され、公立白石小学校と改称された。

23年4月にPTAが創設された。

昭和25年に白石村が札幌市に編入した後、中央地区に母子住宅、本通に市

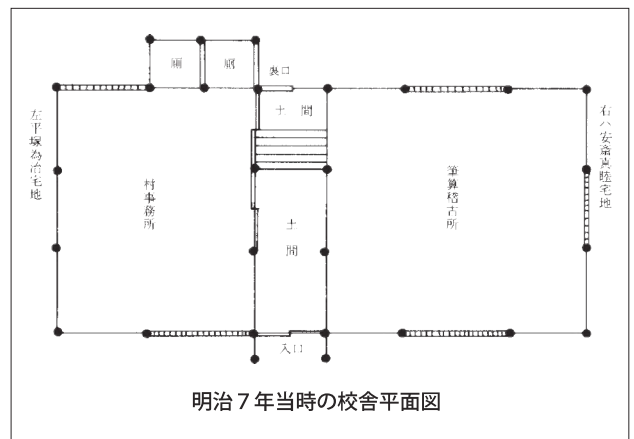
営住宅ができて、このころ地区の人口が急増し始めた。この年の7月に現在の校名である札幌市立白石小学校となった。

昭和26年12月、通学区域変更で東園小学校へ一部の児童が移っていった。その後の増築も焼け石に水の状態で、児童増により昭和33年

に本郷小学校を開校し、この年の10月と翌年9月に通学区域を変更した。ピーク時の昭和34年度には児童数2,082人、27学級となり、すし詰め授業や二部授業をしても追いつかず、音楽室や理科室など6教室は5年間普通教室に転用されていた。

38年1月南郷小学校に分かれ、39年1月本通小学校、40年1月東札幌小学校、41年北郷小学校、47年12月西白石小学校に分かれていった。昭和48年10月、百周年記念式典を挙行し、新校舎が完成した。

(塩見一釜)





現在の旧横丁通。店に横町の名を見ることができる

札幌へ行く道がほしい

明治4年(1871)に白石村に最初の移住者が入植して以来、札幌本府との連絡は望月寒川沿いの細道をたどり、月寒街道(今の国道36号)を利用するのが唯一の方法だった。江別道路(国道12号)ができたのは明治22年である。

翌明治5年、春の融雪とともに低湿地帯の居住者は家の中まで水に浸り、生活不能な状態になった。そのため18戸が横丁(現在の米里行啓通)沿いに移転した。村の形態が整い開墾作業が進むにつれ、村内の道路を往来する車馬も増え、札幌本府への交通路が必要となった。

旧暦明治5年2月、貫属取締・佐藤孝郷は開拓使に願書を提出している。

「-- だんだん雪どけになり一番大事な村の道路が無く、水たまりや水の流れる沢地に橋を掛けなければ通行にも不便です。何とか市街地への通路や村内往来の道を作ってください」

馬の股までぬかる道

この請願を受けた開拓使は明治5年4月から5月にかけて工事を行っている。その内容は、白石神社から横丁通を通して今の国道36号に至るまでの全長2,588間(4.7キロメートル)、幅5間(9メートル)、総経費3,016円97銭2厘を必要としたことが、「開拓使事業報告」に記載さ

れており、この道路が最初の札幌―白石間の連絡道路となった。この5.1キロメートル区間を札幌本府通といい、そのうち現在の白石中央1条3丁目の角から国道36号までの区間を横丁通といていた。

当時の施工方法は現在と異なり盛土程度のもので、4年後には次の請願がされている。

「白石村が開村して4年たちましたが、まだ札幌町まで行く本格的な道路がありません。雨が降るとぬかるみとなり通行がむずかしくなります。村中の者で修繕してきましたが、ぬかるみでは足をとられ、ひどい所は馬の股まで達するところもあって、交通に不便をしています」

また明治9年(1876)の北海道通覧の記事に

「毎年雪が降るたびに村中が総出で豊平まで雪道を開いて通行したが、他の人の足跡を見ることはほとんどなかった」とあり、村人にとって主要な道路だけに維持管理には大変な苦労があったようだ。

東札幌町連30年史座談会での雲田藤助さんの話では、

「大正8年(1919)ころは、道路の脇を流れていた2号用水が春先の雪解け水や大雨が降ると氾濫しました。路盤が悪いから毎年豊平川から採った玉砂利をいくら入れても、しばらくすると沈んで影も形もなくなるんです。雨のときは泥んこ

水に浸かる本通から外れて横丁へ
この道が初の札幌への道になった



道を避けて田の畦^{あぜ}道を歩いたこともありましたね」

ちなみに江別道路(国道12号)は明治22年(1889)8月着工、23年11月竣工^{しゅんこう}の砂利道で、(中央区)北1条東4丁目から上白石村と白石村を経て江別に至る17.7キロ区間だった。

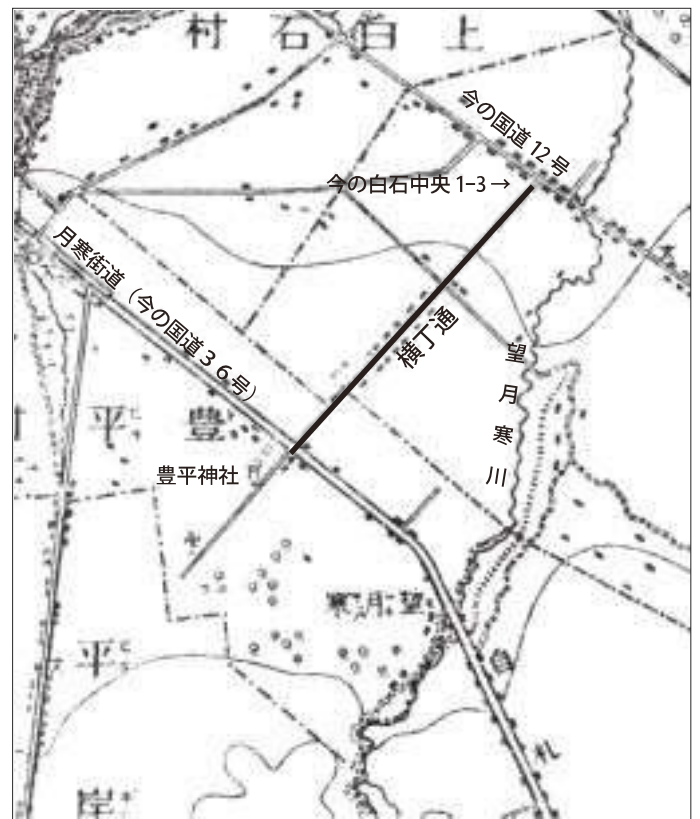
またこれに付随する東橋は明治23年に架橋された吊り橋と板橋で、豊平川の増水時にはたびたび流されたが、この道路のおかげで、豊平橋まで回せずに札幌市街と往来できるようになり、当時の白石・上白石の村民には非常に喜ばれた。

(武田清晃)

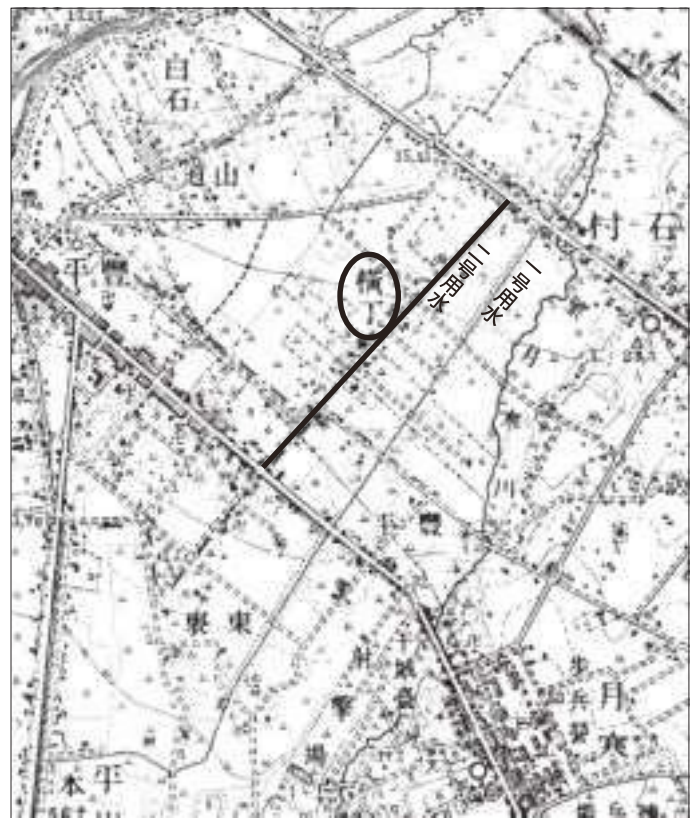
※「横丁」は「横町」とも呼ばれた。地形図では大正5年版には「横丁」、昭和10年版には「横町」と記載されている。



横丁通(昭和23年頃)



明治29年の5万分の1地形図(部分拡大)



大正5年の5万分の1地形図(部分拡大)